

教育研究業績

2026年 5月 1日

氏名 渋谷 寛美

研究分野		学位		
基礎看護学 慢性看護学		博士（看護学）		
研究のキーワード				
技術教育 循環器看護				
教育上の能力に関する事項				
事項	年月日	概要		
1 教育方法の実践例				
2 作成した教科書, 教材				
職務上の実績に関する事項				
事項				
1 資格, 免許 看護師免許 保健師免許 養護教諭第2種免許 助産師免許				
2 特許等				
3 実務の経験を有する者についての特記事項				
4 その他				
研究業績等に関する事項				
著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(著書) 看護学生のための実習記録の書き方	共著	2014	サイオ出版 (pp9 - 15、pp20 - 35)	看護学生が実習記録を書くためのテキストを作成するにあたり、分担者として看護過程についての基礎について解説し、基礎看護学領域に関連する実習記録の書き方について解説をした。 共著者：福田美和子、渋谷寛美、上松恵子、糸井志津乃、西片久美子、小林尚司、藤本薫他
(学術論文)				
ナラティブ分析による心房細動を有する患者の病気に対する認識－第2部 共通の語り－ (査読付)	共著	2013年	日本循環器看護学会誌9 (1) pp. 91-99 日本循環器看護学会	心房細動患者が自身の病気にしてどのような認識を持っているのかについて、患者の語りから分析を行った。その結果心房細動患者の共通の語りを通して、病気に対する3つの共通認識が得られ、患者が語る内容を医療とは無縁の話だと切り捨てようとせずそれらを受容する姿勢を示すことの重要性が示唆された。 共著者：渋谷寛美、福田美和子、平田松吾
ナラティブ分析による心房細動を有する患者の病気に対する認識－第1部 個人の語り－ (査読付)	共著	2013年	日本循環器看護学会誌9 (1) pp. 81-90 日本循環器看護学会	心房細動患者が自身の病気にしてどのような認識を持っているのかについて、患者の語りから分析した。その結果心房細動患者の説明モデルが明らかとなり、医療者は患者の語りを聴く場を設定するなど、外来看護のあり方について考えていく必要性が示唆された。 共著者：渋谷寛美、福田美和子、平田松吾
本学看護学科のリメディアル教育に関する現状と今後の課題 (査読付)	共著	2018年	文京学院大学保健医療技術学部紀要 第11巻 pp. 1-6	少子化に伴う大学全入時代を迎え大学生の基礎学力低下が問題視されつつある。本学看護学科においても、学生に基礎学力の低下が見られる。看護系大学におけるリメディアル教育を概観し、本学の看護学科の現状と今後の課題を検討した。 共著者：増田元香、渋谷寛美、今井亮、山下明美、宮本さとみ、横田素美

Exploring the possibility of virtual reality in nursing skills education: A preliminary study using a first-person video (査読付)	共著	2019年2月	Open Journal of Nursing, 9, pp. 163-172	看護教員が看護技術を実演している一人称視点からの映像を撮影・編集し、そのVR教材をヘッドマウント・ディスプレイにより看護学生に視聴させ、その有効性を介入実験および質問紙調査により検証した。 共著者：渋谷 寛美, 江藤 千里, 鈴木 真由美, 今井 亮, 山下 明美, 中野 理恵, 川鍋 紗織, 横田 素美, 渋谷 賢
熟練看護師の看護技術を疑似体験するバーチャルリアリティ教材の開発：自由記述分析による使用感の評価 (査読付)	共著	2020年9月	日本シミュレーション医療教育学会雑誌 第8巻 2020年	熟練看護師の気管吸引技術を装着カメラで撮影した。一人称映像を学習者が視聴するVR教材を開発した。看護学生36名はVR教材を体験後、その使用感を自由記述により回答し、質的内容分析を行った。本結果は、このタイプのVR教材が疑似体験や映像への集中力を誘発し、看護技術の理解を促進する新たな学習ツールになる可能性を示唆した。共著者：渋谷 寛美, 江藤 千里, 鈴木 真由美, 今井 亮, 山下 明美, 中野 理恵, 川鍋 紗織, 横田 素美, 渋谷 賢
Education programs for invasive procedures involving nurses: A Scoping Review (査読付)	共著	2024年5月	Open Journal of Nursing (pp. 200-224)	本研究では、看護師による侵襲的処置の教育プログラムに関連した現存の文献を Joanna Briggs Institute Reviewer's Manual に準じてスコーピングレビューを実施した。5393件が同定され、最終的に83件の文献を分析した。対象となった侵襲的処置は、①血管穿刺と管理 (65%)、②気道管理 (28%)、③膀胱留置カテーテルの挿入と管理 (5%)、④皮膚膿瘍の切開と排膿 (2%) に分類された。教育プログラムの内容の多くは、講義と実地訓練を組み合わせたものであった。 共著者：渋谷寛美、齋藤昭子、麦山真純、山路野百合、江藤千里、渋谷賢
(学会発表) 学生主体の看護実践能力向上につながる臨地実習前のOSCEの試み-地域住民の教育力を活用して-	共同	2010年	第30回日本看護科学学会学術集会 講演集 p.196	4年次生の総合実習において、SP(Simulated Patient)として地域住民の協力を得て、OSCE(Objective Structured Clinical Examination)を実施したが、その目的と方法、SPの募集と役割、課題や評価シート作成までの教員のジレンマ、学生の反応などについて紹介し、学生主体の看護実践能力につながるOSCEのあり方について、参加者と意見交換を行った。 共同発表者：小林三津子、大澤千恵子、野底奈月、渋谷寛美
心房細動に対する患者の認識-ナラティブ分析を用いて-	共同	2012年	第30回日本看護科学学会学術集会 講演集 p.196	心房細動患者が病気に関する出来事をどのように認識しているかについての、特徴的な語りが得られた3名について報告し、循環器疾患を抱える患者に対する外来看護において、聴くことの重要性について報告した。心房細動を有する患者に対する外来看護のあり方についての意見交換を行った。共同発表者：渋谷寛美、福田美和子
看護技術の修得を促進するバーチャル・リアリティ教材の開発	共同	2019年	第7回日本シミュレーション医療教育学会学術大会 p. 56	看護教員が看護技術を実演している一人称視点からの映像を撮影・編集し、そのVR教材をヘッドマウント・ディスプレイにより看護学生に視聴させ、その有効性を介入実験および質問紙調査により検証した結果についてポスター発表した。 共同発表者：渋谷 寛美, 江藤 千里, 鈴木 真由美, 山下 明美, 横田 素美, 渋谷 賢
「看護師による侵襲的処置の教育プログラムに関する研究：スコーピングレビュー」	共同	2024年	第12回日本シミュレーション医療教育学会学術大会	看護師による侵襲的処置の教育プログラムに関連した現存の文献をマッピングすることを目的とし Joanna Briggs Institute Reviewer's Manual に準じてスコーピングレビューを実施した結果についてポスター発表を行った。 共同発表者：麦山真純、渋谷寛美、齋藤昭子、山路野百合、江藤千里
Barriers and facilitators to implementing nutritional education during antenatal care in low- and middle-income countries: A scoping review	共同	2026年	第44回日本国際保健医療学会西日本地方会 ポスター発表 (査読あり)	本研究は、低・中所得国の妊婦健診において、医療従事者が妊婦への栄養教育を行う上での「課題 (阻害要因)」と「成功の鍵 (促進要因)」を文献レビュー (計12件) によって明らかにした。結果は個人 (医療従事者) レベルと組織 (医療機関) レベルの2つのレベルに整理された。結論：医療従事者への「継続的な研修 (スキルアップ)」と、医療現場の「環境・体制整備 (人やモノの確保)」を同時に進めることが、効果的な妊婦栄養教育には不可欠である。共同発表者：Akiko Saito, Masumi Mugiyama, Hiromi Shibuya, Masahide Kondo

<p>(研究助成金・補助金) 科学研究費補助金(若手B) 心房細動患者における抗凝固薬の内服継続に対する支援プログラムの開発</p>	<p>研究代表者</p>	<p>2016年ー2019年</p>		<p>「心房細動患者の抗凝固薬の服薬行動継続に関する支援プログラムの開発」の研究計画が採択された。本研究は、心房細動患者の抗凝固療法の内服アドヒアランスおよびQOLを維持するための病態管理を含めた療養行動を向上するために、チーム医療の理念に基づいた支援プログラムを確立することを目的として実施した。質問紙を作成し、対象者に調査を実施した。</p>
<p>科学研究費補助金(基盤C) 新人看護師の実践能力向上を支援する気管吸引用VR教材の開発</p>	<p>研究代表者</p>	<p>2020年ー2024年</p>		<p>本研究では、侵襲性の高い気管吸引技術に関する教育の質を高めるため、VR教材の開発を目指した。気管吸引は患者への身体的負担が大きく、新人看護師には早期から実施能力が求められる重要な技術であるが、その習得には困難を伴う。教材開発には至らなかったものの、教育手法の現状把握を目的としたスコーピングレビューを実施した。さらに、国内において在宅で介護を行っている家族介護者を対象に、どのような侵襲性のある処置を担っているか、またその教育支援の実態に関する調査を実施し、現在分析を進めている。</p>
<p>科学研究費補助金(基盤C) 在宅介護を担う家族に向けた痰吸引のVR教材の開発</p>	<p>研究代表者</p>	<p>2025年ー2029年</p>		<p>在宅患者の家族介護者にとって、痰吸引は精神的負担が大きく、不適切な実施によって肺炎や緊急入院を引き起こすリスクもある。本研究では、痰吸引に対する家族介護者の課題や不安を明らかにし、それらを支援するVR教材の試作版を開発・評価したうえで、最終的に有効性に基づいた教材を完成させることを目的とする。</p>